

---

# **英理の目線の先に.....。**

さばら

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英理の目線の先に . . . . .

### 【Zコード】

Z0417A

### 【作者名】

さばり

### 【あらすじ】

英理さんがふと目線を変えたときのことです。そこには、一人の帽子を被った女が歩いていました。あの表情から、口者ではなさそうです。

私は妃英理、法曹界のクイーンと呼ばれる敏腕弁護士である。

現在、夫毛利小五郎と娘蘭を残して別居生活を送っている。

あの人にもしつかりしてもらわないと . . . . 。

蘭が心配するわけがよくわかるわ。

ところで最近、私の目線に見知らぬ女が現れるの。

一体誰 . . . . ?

ある金曜日の夕方、私は事務所を出て秘書の栗山綠とアーケード街を歩いていた。

英理「さすが金曜の夕方ね。サラリーマンも思いつきり羽伸ばしているわね。私も少しは、パーッとやりたいわ。」

栗山「私も同感です、先生。机に向ってばかりでは疲れますよね。英理「来週からまた忙しくなるわ。また戻つて書類処理をやらないと . . 。（あの人気が酔つ払つて絡まないといいんだけど。）」

栗山「そんなに無理しないで下さい。」

英理「だつてノロノロしてたら遅れるでしょ。」

栗山「先生、もうすぐ（信号が）青になりますよ。」

横断歩道を渡ろうとして私が田を右に向けたとき、一人の女が私を睨みつけた。

ベルモット「 . . . . . (睨) . . . 」

英理「 . . . . . (怯) ! ! 」

栗山「どうしましたか、先生？」

英理「べ・別に気にしなくていいわよ。目線が一致しただけよ。」

栗山「 . . . . . (私にはそうは思えないのに . . . . . )」

ベルモット「 . . . . . (あの眼鏡をかけた女が“法曹界のクイーン”と呼ぶれる弁護士妃英理ね。私と対決して勝てるのかしら?でも、私の秘密はそう簡単にわからないわよ。)」

英理「あの女は只者ではないわ。勝つのに梃子摺りそつね。」

栗山「先生、早く行きませんか？」

英理「でも信号が変わりそうだから、遠回りしましょ。」

栗山「は・はい。」

ベルモット「（今日は、行きつけのバーの近くも賑わいそうだわ。通りがかりの人に目を付けられないよう注意しないと。）「あの女は、終始私の行動が気になつたらしい。

2週間後の日曜の昼、私は蘭と小五郎の2人とコーヒー・ショッピングで休息を取っていた。

この日は、家族連れやカップルで大いに賑わっていた。  
蘭はまだいいけど、あの人つたらちゃんとした格好をしてないんだから。。。。。

英理「ふーーー！ショッピングした後にコーヒーを飲むと落ち着くわね。」

小五郎「本当に疲れたぜ。こんなにデパートを歩き回ったのは久しぶりだよ。」

蘭「お父さん。とても真面目に付き合つていたように思えなかつたわ。」

英理「あなたは昔から代わらないわね。少しは女性の買い物をわかつてよ。私達は楽しんでいるのよ。」

蘭「これじゃ、新一と同じね。」

小五郎「こらーーー！2人で俺を責めるなーーーそれに、探偵ボウズと一緒にするんじゃねえーーー！」

蘭「（これだと夫婦喧嘩は永遠に終わりそうもないわ。）

英理「ちょっと失礼するわ。私、ちょっと席外すから。」

小五郎「よし、待つているぞ。」

私が席を外そうとしたとき、あの女が店に入った。

店員A「いらっしゃいませーーー！」

ベルモット「…………（睨）……」

英理「…………（怯）……」

蘭「どうしたの、お母さん？」

英理「蘭が気にすること無いわ。私が気になつたのよ。」

小五郎「そ・そつか？もしかしたら、犯罪組織と関係あるんじゃねえのか？」

英理「必ずしもやうとは言えないわよ。」

ベルモット「…………（今田は毛利小五郎と娘と一緒に歩いていたわね。この店は私が一人で行ったカフェにそっくりね。）」

店員B「お席は奥でよろしいでしょうか？」

ベルモット「構わないわ。」

英理「…………（もしかしたらあの女、長居する気じゃないかしら？）」

ベルモット「…………（3人の田を気にしないでゆっくりしようかしら？）」

あの女は、私達が出るまで何事もなかつたかのような表情を浮かべていた。

ある土曜の夕方、私は新しいシャツを買おうと前の台にある洋服店に入った。

この日は、偶然田に留まつた広告にあつた特売品が田当てだつた。

英理「…………（それにしても込んでいいわね。今日はあの服が目玉ね。まあ、仕方が無いか。）」

蘭「お母さん……」

園子「おばさま、いらっしゃよ……」

英理「蘭、園子ちゃん！……どうしてここに？」

園子「実はね、隣のクラスの娘が行つて口口口になつたの。それで、

蘭も一緒に行こうとなつたわけ。でも、蘭は乗る気じや無かつた。」

蘭「それはすぐに考えが纏まらなかつたからよ。」

英理「いいわね。私も友達同士の会話が切欠で駆けつけたことがあつたわ。あれつ、私の目当てのシャツが残り少ないわね。□□ミ通りの店ね。」

蘭「これなら、お母さんを引き立ててくれそうよ。」

英理「照れるわ、蘭。あの人はどんな反応見せるかしら？」

蘭「さあ。お父さんは、服装や髪の変化にあまり気付いてくれなかつたから。」

園子「まあ、その点は新一君と同じね。」

私達が楽しく会話をしていたとき、またあの女が現れた。

ベルモット「…………（睨）！…」

英理「…………（怯）！…」

蘭「お母さん、大丈夫？」

園子「おば様……あの女性は、この間パーティー会場の前にもいたわよ。」

英理「本当に？」

ベルモット「（おや、今日は娘とその友達と一緒にだわ。しかも、お嬢様が相手とね。）」

英理「…………（あの女もバーゲンの服を狙っているんじゃないのかしら？パーティーによく来るのは、変装の名人みたいね。）」  
私には、あの女と表情と行動を見る毎に正体がわかつてきた。

学校が夏休みに入ったある日、私が入ったレストランには蘭と和葉ちゃんがいた。

英理「調度いいわ。この店で休むことにしよう。」

店員C「いらっしゃいませ！」

蘭「お母さん……今日は、和葉ちゃんも一緒なの。」

英理「蘭！！」

和葉「あんたが蘭ちゃんのお母さん？ほんならあたしと蘭ちゃんにどこに座らへん？」

英理「ありがとう。蘭、いいお友達を持つたわね。」

蘭「和葉ちゃん、実はね……（和葉の耳で囁く）。」

和葉「えっ！－ほんま？蘭ちゃんのお母さんが法曹界のクイーンな  
やんて。」

英理「よく世間が私をケイーんと駆り立てるけど、私は人が見るほど目が鋭くないわよ。」

和葉「誰もお見通しや。おばあちゃんの勘は、平次よりずっと上やん。」  
突拍子も無い行動と無関係そうやし。「

機體「飛龍」の日暮れ時刻

英理「照れるわ、和葉ちゃん。そう言えは、関西の高校生探偵は来ないの？それより、私にしつこく近づいてくる人がいるの。」

和葉「もし、おばあちゃんに出したら、あたしがじばいてやるから

!!あ(驚)!! あから来た!!

和葉ちゃんの予感とおり、あの女がまだ通り掛った  
今度は、ソフビの口元をしてハニ。

ベルモット「…………（睨）――」

英理  
—  
· · · · ·  
（恠）！！！

ベルモット」……（今日また別の女と一緒にだわ。どうせ）。娘の反対が止まない。口では「まだつづく」と。

和葉「おばちゃん、どうしたん？」

英理、驚くことじゃないわ。彼女も休みだからなのよ。

ベルモット「ええ。

店員D「でしたら、奥から3番目の席へどうぞ。」

英理「さっきの出来事が無かつたかのような表情を浮かべているわ。

蘭「お母さんが無事だといいんだけど。あれっ……」ナン君と服部

君たれ  
」

「ナン」「入るぞーーー（でも、あの女がいるぞ。）」

平次「ああ……」

店員D「いらっしゃいませ……」

ベルモット「…………（工藤新一と服部平次が入ったわ。ただじやおかないわよ。）」

平次「和葉、ここにおつたんか？ 捜しどたで……毛利の姉ちゃんと弁護士のおばちゃんも一緒に？」

コナン「蘭姉ちゃん……」

和葉「平次、コナン君に何しとつたんの？ あたらしらを心配させたんは、あんた達やん……！」

平次「アホ！ ！ 日野さんが死ぬが死なへんかの瀬戸際やつたんや！ ！俺とボウズの力で助かつたんや！ ！」

英理「相変わらず、無謀で危険な探偵ゴッコをしているのね。いい加減にしないと女性を悲しませるわよ。」

蘭「お母さんの言つことによくわかるわ。」

コナン「……（おばさん、あんたら言われたかねえよ。）」

平次「初めて知つたわ。法曹界のクイーンが毛利の姉ちゃんのおかんやつたなんて。」

英理「悪いわね、平次君。今まで、あなた達の前で蘭の母と名乗つたことが無かつたのよ。」

ベルモット「……（服部平次と遠山和葉ね。また一人ターゲットを見つけたわ。）」

8月中旬の夕方、私は十河浜のファミリーレストランに立ち寄った。

店員E「いらっしゃいませ……」

コナン「……（また来たか……）」

阿笠「おつー！ 英理さん……」

哀「よくいらしたわね、法曹界のクイーン。」

元太「弁護士のおばちゃん、こっち來たらどうだ？」

光彦「英理さん、僕達と一緒にどうですか？」

歩美「おばさん、こっちはとても楽しいわよ。」

英理「みんな、ありがと。」

その声の主は、阿笠博士と少年探偵団だつた。

それを聞いて、私を歓迎してくれているように思え嬉しかつた。

英理「子供達に囮まれて賑やかな場所に来られてよかつたわ。私は夜になると一人ぼっちで寂しいのよ。」

元太「そりや、おばちゃんは毛利のおっちゃんと別居状態だもんな。」

光彦「元太君、少しばかずは言つ場面を考えて下さいよ。」

哀「小嶋君。言われた人の身になつてごらんなさい。」

英理「もしお困りの旦那さん・同僚がいたら、私の相談するといいわね。」

コナン「……（心配だよな。フフフ！）」

阿笠「わしにもよく理解できる。探偵団が出来る前までは、夜何も食べずに寝たこともあつたぞ。」

英理「みんなのお陰で、気分が楽になつたわ。」

コナン「それじゃ、注文しようか？」

「ナン君がメニューに目をやつたとき、またあの女が店に入った。

ベルモット「…………（睨）！」

英理「…………（怯）！」

歩美「おばさん、どうしたの？」

阿笠「英理さん、あの女に見覚えあるじゃないかのう？」

ベルモット「…………（今日はさらに子供が多いわね。それに、メガネの研究者と組織を裏切ったシェリーもいるわ。）」

英理「博士と哀ちゃんを真剣な表情で見ていたわ。只者ではなさそうね。」

私が店の奥に目をやると、一人の野球帽を被つた男がいた。

英理「間違いないわ。あの男は賽銭泥棒だわ。」

コナン「そうだね、おばさん。」

阿笠「わしが電話を入れよう。」

大竹「（やべつ！！気付かれたか？逃げ場無いな。）」

英理「ちょっと、いいですか？あなた、米花神社から賽銭を盗んだわね。」

大竹「げつ！！俺はやつてない！！」

コナン「いや、あんたがやつた証拠ならあるよ。小銭が妙に多いね。現場でカードを落としていたよね、大竹俊一さん。」

大竹「うううつ！！」

英理「この場所にあなたの名前が書かれたカードが書かれていた上、今履いている靴と足跡がピタリと一致したのよ。」

大竹「す・すまん。俺がやつた！！全部で30件起こしたんだよ。」

ベルモット「（あの男、組織を脱走した奴に似ているわ。）」

店には、通報を受けた都甲署の黒石刑事が入ってきた。

黒石「大竹俊一だな。」

大竹「は・はい。」

黒石「窃盗の疑いで逮捕する。」

阿笠「英理さん中々やるのう。」

英理「表情と動作を見て怪しいと思わない？ 罪を背負っている姿を絶対に見られたくないのよ。特に私のような勘の鋭い人の前ではね。」

光彦「英理さん、よく見抜きましたね。」

元太「コナン、おばちゃんを見習えよ。」

歩美「おばさん、しつかり人の心を見ているわね。私を見習いたいわ。」

英理「そんなに私を褒めないでよ。」

コナン「……（これじゃ、俺は迷探偵か？）」

ベルモット「……（フ・フ・フ（笑）！！毛利小五郎には勝てても、妃英理には勝てそうもないわ。）」

9月中旬の朝、突然私の電話がなった。

その日、私は徹夜で担当事件の書類を整理していた。

電話一フルフルフル！！

英理一 ふあう！！「んな朝に何のようなのよ！！」

私はとても早く起き上がるのも大変だった

英理・もしもし 始法律相談事務所です

有希子、英理!! お久しぶりね 何も話せなくてごめんね

おはーい、有希子とおがじたのよ。

有希子 実はね、また優作と喧嘩したがの  
疲れているのは無

だから、そのとおもふよろしく。

英理「よくわかるわ。私だって無茶なことを押し付けられるのは田

に行かない?帰りに (レストラジ) Cherry Rose によ

「うめのまつり」

英語「ジンモウ」の日本語翻訳の困難性

有希子「いいわ。日曜ね。」「

英理「また、あの女が現れたにれにしのにね」

2週間後の日曜  
私は約束の時間になつても来ない有希子をずっと待つていた。

英理、相変わらず遅いわね。早く締めの時間になるのに」

英里「給おれの海賊子!!」別にいい

有希子「それなら、デパートに入りましょう。新作の化粧水と口紅

私達がデパートに入ろうとしたとき、またあの女が現れた。

ベルモット「…………（睨）――」  
英理「…………（去）――」

有希子「どうしたの、英理？あれつ！」

英理「変に目を向けちゃダメよ。きっと何かを起こすわよ。」

ベルモット「…………（ついに法曹界のクイーンと闇の男爵夫人がお揃いだわ。ボスに何と言おうかしら？）」

あちこち店内を歩き回っていると、CMで見た店が見えてきた。

有希子「英理……あつちょ……」

店員F「いらっしゃいませ……」

有希子「わ～、いい香りね。」

英理「これなら一生若さが保たれるわ。」

店員F「発売されたばかりのですが、人気があつてお早めでないと売り切れます。（婦人方をやり一層引き立てますよ。）

有希子「いいわ～！優作は間違いなく絶賛するわ。」

英理「気付いてくれるだけで羨ましいわ。でも、あの人つたら……

…。

有希子「よくわかるわ。小五郎君つてウチの新一同様にファッショ

ンや化粧品にあまり関心を向けないのね。」

英理「少しばかり興味のある所をわかつて欲しいわ。」

私が有希子と店員と話している間に、売り場へあの女が入ってきた。  
ベルモット「…………（睨）……」

英理「…………（怯）……」

店員F「お客様、どうかなさいましたか？」

英理「お気遣いありがとうございました。でも、大丈夫よ。」

ベルモット「…………（化粧水は、私の拘っている物よ。あの2人に負けられないわ。）」

有希子「昔からずっと私への憧れを抱いているようだわ。」

英理「昔から…………？」

有希子「英理が気にする」とじゃないわ。何でも無いわよ。」

英理「…………（いや、間違いなく有希子の秘密を握っているわ。）」

店員F「いらっしゃいませ！…」

ベルモット「ちょっとといいかしら？私もこの化粧水を試したいの。」

店員F「よろしいですよ。」

あの女は、終始目当ての化粧水を使っていた。

私達はファッショングロアに入り、一着のワンピースに目が留まった。

店員G「いらっしゃいませ！…」

それは、以前蘭がパーティーで着た物に似ていた。

英理「あれっ！！蘭が着たのに似ているわ。」

有希子「可愛い！！パーティーで輝きを放ちたいわ。それに、真由ちゃんが持つていそうね。」

英理「真由ちゃん……もしかして、蘭にそっくりな娘こと？髪型以外は似ていたのを憶えているわ。お母さんもそっくりだったわね。」

有希子「性格も蘭ちゃんそのものよ。“私は末っ子なのに弟と妹がいるようで嬉しい。”の一言はよくわかるわ。今ではまるで本当のお姉さんみたいなの。」

英理「姉、姉と言うけど、私は一番上だつたら余り甘えられなかつたわ。兄・姉がいればよかつたわ。」

私がふと目線を外すと、あの女が歩いていた。

ベルモット「…………（睨）！…」

英理「…………（怯）！…」

店員G「お客様、どうかなさいましたか？」

英理「心配しなくていいわよ。偶然、目に留まつただけでしちゃうね。」

ベルモット「…………（組織の服装には疲れたわ。たまには、ワンピースもいいわね。）」

有希子「しつかりと（ワンピースを）見てること。」

英理「やっぱり目が鋭いわね。」

夕方5時半、私達はレストラン「Cherry Rose」へと向つた。

有希子「今日もたくさん買つちゃった。」

英理「これなら、男性が一杯振り向きそうね。」

有希子・レスエランの雰囲気が目に浮かんで来そうだね お洒落な

ンパン、想像するだけでロマンチックだわ。

英理「あら、これじや「Lucia」の一場面ね。女性の理想の店

たれの度は落が暮れて樂しみるにやう

歩くこと12分  
e「に着いた。  
私達は予約を入れていた「Cherry Ross

店内は、既に予約客で一杯だつた。

店員エ「いらっしゃいませーーー。6番のお席へどうぞ。」

英理「6番は、お花がある前だわ。」

有希子、素敵ね。もうお姫様だね。

有希子「いいわ～！！女優に戻った気分！！優作にも薦めたいわ。」

英理・有希子・眞はマリヤ・元川・チカ子  
が以爲うのな。 徒女もお荷とワイン

有希子「やだ～！～英理つたら～！～「Lucia」の世界に入

つているのね。」

そのとき、あの女が1人の男を連れて席に

英理「……（怯）……」

ソムリエ「お客様どうかなさいましたか?」

英理「いいえ。気にしなくてもいいわよ。」

ベルモット「…………（ワイン・シャンパンと私は切つても切り離せない関係。2人の女には負けられないわ。）」

ソムリエ「それでは、ワインをお選び下さい。」

店員H「いらっしゃいませ！！2名様で？」

ベルモット「ええ。」

英理「あの女は、このワインを飲みそ�だわ。」

ソムリエ「…………（何て勘の鋭いお客様なんだ。）」

ヌーボー「どのワインにする？」「

ベルモット「私は、こっちにするわ。」

有希子「英理、勘が鋭いわね。」

私達がメインディッシュに入ろうとしていたとき、2人の男が店の外にいた。

それは、小五郎と優作さんだった。

小五郎「おお～！！綺麗な人が多いな～！！」

優作「静かにして。無駄なことに目が行つたら怪しまれるよ。」

ベルモット「…………（探偵の毛利小五郎と作家の工藤優作

ね。夫人が気になつて目を留めてるわ。）」

小五郎「何だ！！英理と有希ちゃんがいるぞーーー！」

優作「外へ出るのを待とう。」

そして、私達が店を出たとき。

英理・有希子「あなた！！」

有希子「小五郎君、犯人を追つてたの？」

小五郎「英理！！それに有希ちゃんも一緒にーーー！」

優作「突然、姿を消すもんだから追つてきたんだ。いくら隠しても俺にはお見通しだよ。」

英理「あの女がいると、「ワインレッドのショックカー」かしら？」

優作「英理さん、よく気付いたね。シャロン・ビンヤードがどこか

にいそうだね。」

有希子「まさか！！」

ベルモット「…………（睨）！…」

英理・有希子「…………（怯）！…」

ベルモット「…………（私が女優だと言いたいの？簡単に決め付けないでよ。）」

小五郎「どうしたんだ、英理・有希ちゃん？誰かが変装しているんじゃないのか？」

英理「見破るのが難しいわね。あの女の顔は100以上ね。」

10月上旬、私は人質立てこもり犯田端明の弁護人を務めていた。検事席には九条検事、裁判長は大岡判事によって進められていた。九条「以上のように、鑑定は信用性に欠ける物であります。」

英理「意義あり！！」

大岡「弁護人！！」

ベルモット「…………（睨）！…」

英理「…………（怯）！…」

なんと、あの女が傍聴席正面にいた。

ベルモット「…………（鑑定は私には効かないのよね。今回は、相当梃子摺るんじゃないかしら。）」

大岡「弁護人！！」

英理「鑑定は客観的かつ明瞭に進められたのであり、被告人のためを変えられた形跡はありません。」

ベルモット「…………（評判は100%本当のようね。私にはぐうの一言も出ないわ。）」

英理「…………（私もいつかあなたの正体を見抜いて見せるわよ。）」

あの女の正体を見破るのは難しくても、心を読むことはできた。私を見て、心が丸くなつたに違いない。

優しい元の姿に戻ることを願う。

- 完 -

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0417a/>

---

英理の目線の先に.....。

2010年10月30日05時44分発行